

小学生と「港の大研究」！

井川 裕揮¹・梶本 玲佳²

¹近畿地方整備局 舞鶴港湾事務所 補償調査官 (〒624-0946京都府舞鶴市下福井910番地)

²近畿地方整備局 舞鶴港湾事務所 総務課 (〒624-0946京都府舞鶴市下福井910番地)

港湾関係組織では、小学生向け社会科学習教材「港の大研究」を小学校に配布し、希望する小学校に現場見学開催や講師派遣を実施しています。この度、舞鶴港湾事務所管内の滋賀県の2つの小学校から要請があり、若手職員3名を派遣し、児童達と共に港の大研究を実施しました。

若手職員達は小学5年生との「港の大研究」を成功させるために、クイズを織り交ぜながら、船や港の役割、貿易等について学習し、参加した児童からは「港が無いと物（チョコレート）が高くなる！」「TEUって知らなかった！」などの感想がありました。

本稿では、小学生との「港の大研究」で工夫した取組み等について紹介を行うものです。

キーワード 港の大研究、出前講座

1. 出前講座の目的について

国土交通省近畿地方整備局では、国民のみなさんとの対話を重視したコミュニケーション型行政を推進しています。その中でも、港湾関係組織においては、近畿地方整備局が行っている港湾事業や施策などについて、もっとみなさんに幅広く知っていただくことを目的として、分かりやすく解説することをモットーに、公共性・公益性のある団体・機関等を対象に「出前講座」の実施をしています。

2. 出前講座2020年度実績について

舞鶴港湾事務所では、2020年度において、出前講座を以下の2小学校に対して実施しました。

- ① 滋賀県高島市立新旭南小学校 5年生 55名
実施日 2020年11月26日
- ② 滋賀県大津市立膳所小学校 5年生 97名
実施日 2020年11月27日

これに加えて、兵庫県豊岡市立静修小学校（5年生8名、6年生8名）からは、港の見学の希望がありましたが、移動手段としてバスを予定していたため、新型コロナウイルス感染防止対策上、バスでの移動は不可と学校側が判断し、今回は残念ながら辞退されました。

小学校での社会科授業の一環として、貿易を学習するにあたり、港がどのような役割を果たしているのかについて学ぶ機会があれば、という小学校側からの要望があり、新型コロナウイルス蔓延状況の中ではあるが、感染防止対策を十二分に行った上で、舞鶴港湾事務所の若手

職員3名を現地に派遣しました。

今回の出前講座の対象となる上記の小学校2校については、共に滋賀県の小学校であり、港に関してはあまり馴染みのない地域です。その条件下において、どのようにして港のイメージを理解してもらえるか、また、港が貿易を行う上で大変重要な役割を果たしているのかを学んでももらえるか、ベテラン職員と若手職員との間で事前打ち合わせを行い、念密な準備を行いました。



図-1 滋賀県小学校の位置図

3. 「港の大研究」とは

私たちが暮らす日本国は、島国であり輸出入貨物の99.6%が「港」を経由しており、その「港」がなければ私たちの生活基盤そのものが成立することはありません。また、津波や高潮などの自然災害から陸域を守るため、防波堤など港に関する構造物などが重要な役割を果

たしています。にもかかわらず、年少者をはじめ、多くの人々にとって、その認識が小さい状況にあります。

この状況を改善する施策の一環として、国土交通省港湾局では株式会社 学研プラス及び公益社団法人 日本港湾協会と協力を行い、毎年、小学生向け社会科学習教材「港の大研究」を小学校に配布しており、希望する小学校に対しては、最寄りの各港湾事務所より現場見学や講師派遣の実施をしております。

「港の大研究」では、日常生活とのかかわりを理解してもらう「港とわたしたちの暮らし①」、災害対策の工夫を紹介する「港とわたしたちの暮らし②」、港湾施設の種類や構造を紹介する「港のしくみ」、港湾運営や物流を理解してもらう「港のしごと」の4コースが例示されており、それぞれ組み合わせで2時間授業で完結するように構成されております。

この4コースから各小学校で希望するコースを選択される形式を採用しておりますが、児童は「港湾」に対して「港巡り」以上の知識を持っていないため、『「港」とはどのようなものか』を説明する「港とわたしたちの暮らし①」と「港のしごと」を選択するケースが多いような状況です。

我々としては、「港のしくみ」が工事内容の8割方が海中という港湾工事の特殊性を説明する点からも興味を持ってもらえると考えられるのですが、選択される事例も少ないことが今後の課題です。

4. 実施内容

今回の実施箇所が滋賀県内ということで、日頃「港」に馴染みの無い児童たちに、「港とはどのようなものか」から興味をもってもらうため、以下の4点を特に意識をした上で授業を行いました。

1) 説明は短く簡潔に行う。

相手に理解をしてもらうために説明を行うと、伝えたいという思いが強くなってしまい、どうしても説明が長くなってしまい、かえって相手に伝わりにくくなってしまいます。特に、小学生児童の場合であれば、理解力もまだ低く、集中力も長く続きません。そのため、説明を行う際には、説明資料は短く簡潔に作成を行い、口頭で説明を行う際にも理解しやすいように簡潔に、かつ平易な言葉で行うことを意識しました。

2) クイズの利用

授業を行う上では、一方的な説明にならないように、クイズ形式での授業を一部実施し、参加型となるよう意識しました。



図-2 小学生向け説明資料の抜粋

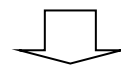
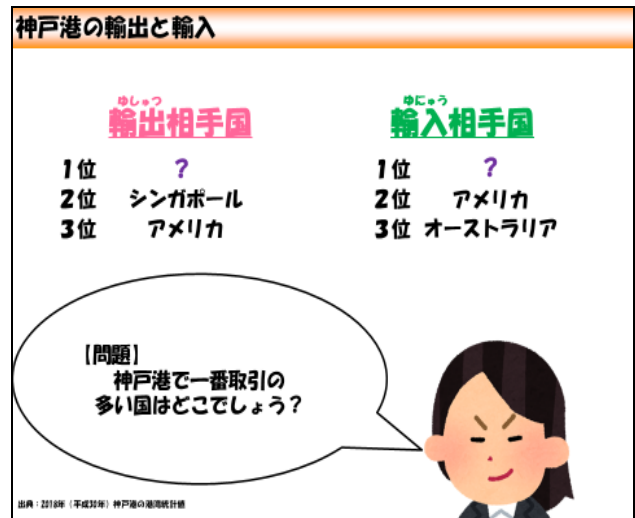


図-3 クイズ形式による説明資料

先生のお話では、事前に配布した学習教材「港の大研究」を使っでの授業はしていないということでしたが、質問の答えを教材の中から見つけて「ここに書いてる!」と元気よく答えてくれました。

クイズとは関係なく、逆に「博多港の貿易額は、いくらですか?」「TEUの英語表記は?」などの鋭い質問もありました。

3) 滋賀県の港について

港と聞くと広大な海や海水浴などのイメージがありますが、海に面していない滋賀県の琵琶湖にも港があることを紹介し、湖めぐりや湖内の島への定期観光船の発着場に利用されているなど、生活に密着した場所であることを説明しました。



図4 滋賀県内の港について

4) 新型コロナウイルス感染防止対策

講師派遣に当たっては、どのような感染対策を行うかを学校側と事前に調整しました。

その結果、児童全員を講堂などに集めることなく、各クラスごとに授業を行うことや、飛沫防止対策のため、事務所職員、児童ともにマスクを装着し換気しながら、授業を行うこととしました。

5. 小学校側の期待

社会科の授業で、工業生産について学習したとのことで、これに関連して工業生産における港の役割を知るということを学習の目的としたいということでした。

子供たちは港で働く人やコンテナ、自分たちの住む滋賀県に近い港や船の種類、荷役機械の種類について、地元の港について等に興味があるとのことでした。

また、学習の目的とは少し外れるかも知れませんが、コロナ禍で予定していた行事が軒並み中止となっていて外部との接触がないので、今回の講座を子供たちは本当に楽しみにしているとのことをお話を伺いました。

6. 児童・先生方の反応

出前講座を終えた後に、実施した小学校児童及び先生方に対してアンケートを行い、以下のような感想をいただきました。

・「港は生活にとっても関係していて、なくなってしまうと、日本の人たちの生活ができなくなってしまうこと

を学ぶことができました。」

・「コンテナの数え方について、TEUという単位があるのを初めて知りました。」

・「船がないと輸出入がほとんどできないから、船がとまる港の存在は大切だということが分かりました。」

・「飛行機と船では、1度に取り扱うことのできる貨物量と時間が違い、それぞれ長所短所があることを学ぶことができました。」



図5 出前講座での児童たちの様子 (写真)

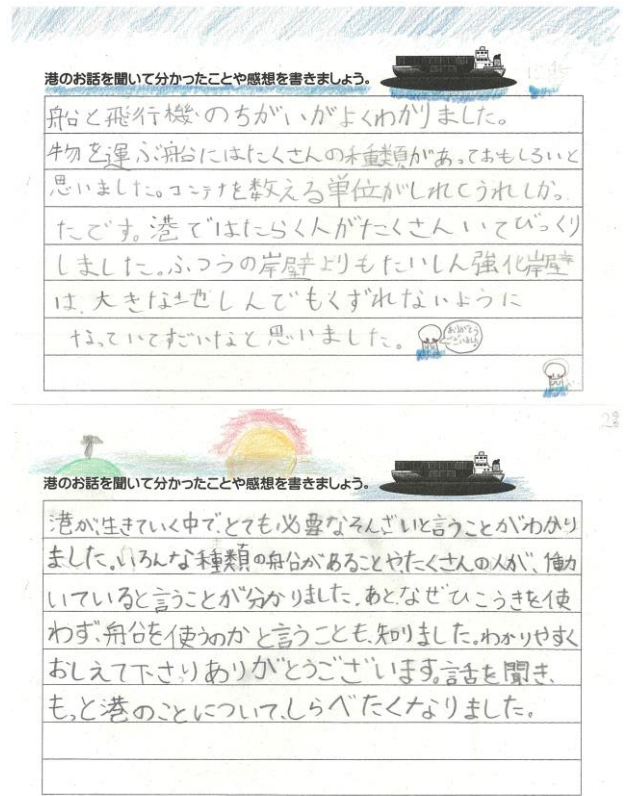


図6 児童たちからの感想文

7. 今後の改善点

今回の出前講座で実施した港の大研究については、児童及び先生方からは、港に携わる国土交通省の職員から授業を受けることができて良かったなど、肯定的な意見を多数いただきましたが、今後小学生達に対し、より一層港に対して興味もってもらうことや、理解を深めてもらうために再度フォローアップを行うことを検討しています。

1) グループワークなどの活用

授業が一方向的にならないように、児童達にも主体的に参加してもらうために、今回はクイズ形式を一部実施しましたが、5、6年生の授業ではグループワークによる討議も有効と感じています。

知識の吸収だけで無く、「これからの港にどんなことを期待するか」という未来に向けた「思い」を養えればと考えます。

2) 港での現場見学会

座学で学んだことを確認し有機的な繋がりを理解してもらうためには、実際に目で見てもらう見学会は何よりも有効と考えています。

今回は新型コロナウイルス対策の影響もあり、実施に至りませんでした。今後予定されている遠足などの機会を活用していただくよう働きかけを継続していきます。

また、MRを活用したバーチャル見学会もこれからの方策の一つと考えています。

8. おわりに

管轄内とはいえ、コンテナやガントリークレーンなど港に関する施設が身近にない滋賀県の小学生に対し「港の役割」をどのように伝えられるか、不安がありました。

また、子供が苦手なので、断りたかったが仕方なく引き受けたという思いをもっていた者もありましたが、子供たちの素直な反応に助けられ、最後には子供たちに自分たちの仕事を伝えたいという気持ちが大きくなっていったと感じています。

この港の大研究については、小学生達に対して港について授業を行うものですが、逆に言えば、職員達が授業を行うにあたり、事前準備などを通じて港について学習する機会とも言えます。

特に入省して間もない若手職員が講師となって説明を行うことは、日頃の業務を円滑に行う上でも大変身になる機会だと考えます。

知らないことを知る喜びを小学生たちの顔に見ることができたことは、自信に繋がる良い経験となりました。

新型コロナウイルス蔓延の状況にもよりますが、今後もこのような機会を積極的に活用したいと考えます。

また、今回の出前講座が機会となり、港に興味を持っていただいで、何年か後に一緒に働く仲間となって欲しいと考えております。

最後になりましたが、コロナ禍で大変な中、講師派遣を受け入れてくださった2校の皆さまに、この場を借りて感謝申し上げます。